◎インタビュー

いじめ問題と向き合う

～金メダリストは県教育委員長～

元体操選手・具志堅幸司さんを訪ねて

五輪体操金メダリストの具志堅幸司さん（五七）は、神奈川県内での学校教育・社会教育・生涯学習など教育行政を管理する神奈川県教育委員会の教育委員長であり、多くのスポーツ選手や体育指導者を輩出し、百二十年以上の歴史を持つ日本体育大学の体育学部長でもある。教育委員長として、いじめ問題など今日的課題に向き合う一方、アスリートとして、体育関係者として、六年後に開催される東京五輪への関心も強い。二年前からは神奈川県共同募金会の評議員も務め、多忙な毎日を送る具志堅さんを訪ねた。

――体操選手の演技を見ていると、とても人間業とは思えません。逆立ちだって難しいのに、よく空中で体をひねったり、鉄棒で回転しながら手を放し、また鉄棒をつかむことができるものです。

具志堅　私が体操を始めたきっかけは、メキシコ五輪での加藤沢男選手の演技をテレビで見たときです。「あれはトリックではないか」と疑ったほど、素晴らしい業に感激し、「自分も五輪選手になりたい」と思うようになりました。

もともと、すばしっこかったのは確かですが、恩師から「体操の素質は人並みだが、努力する素質はある」と言われたように、努力だけは体操以外でも人一倍重ねたように思います。

中学二年の時から体操を始め、名門清風高校に進学したいと考えました。しかし、そこは大阪でも偏差値がトップクラス。担任からは「お前の学力では逆立ちしても無理」と言われたので、「逆立ちは得意です」と言い返し（笑い）、合格を目指すため「塾へ行く」「塾の学費を稼ぐため、朝牛乳配達をする」「朝練をする」「学校の勉強もする」「放課後は体操の練習をする」という五つの試練を自分に課しました。

けがなど克服した五輪

両親は沖縄出身だが、自身は大阪生まれの大阪育ち。子供のころからけがに付きまとわれ、小学生の時、頭がい骨骨折や一週間に二回も骨折し、

ぎりぎりで清風に合格しましたが、薄い紙を一枚一枚積んで高くするように、目標を持って毎日努力すること、努力する過程の中で考える力・実行する力・継続する力を学ぶこと、喜びは苦しみぬいた末に味わえるものだということを、身をもって体験しました。今も心の支えとして残っており、仕事にも生きています。人生のターニングポイントだったといっていいでしょう。

一年半休学する羽目に。大学在学中にはアキレスけん断裂や足首骨折を経験した。また、一九八〇（昭和五十五）年のモスクワ五輪代表に選ばれたものの、日本ボイコットで不参加。幾多のけがや挫折、不運を克服し、八四年のロサンゼルス五輪では体操個人総合とつり輪で金、跳馬で銀、団体総合と鉄棒で銅メダルを獲得、日本人に感動と勇気を与えた。

――六年後の東京五輪に向けて、体操の白井健三選手（神奈川・岸根高校）をはじめ、陸上、水泳、卓球など各競技で若い有望選手が育ってきています。楽しみですね。

具志堅　東京で開催されるオリンピックに日本代表選手として出場できる、なんと幸せな世代なんでしょう。選手が開催場所を決めることなど、できないのですから。モチベーションは上がり、エネルギーが湧き出ることでしょう。うらやましい限りです。

選手も一生懸命になるでしょうが、若い選手を育てる指導者にも熱が入ることでしょう。特に体操競技は選手人口が少ないにもかかわらず、毎年世界レベルでメダルに絡む選手が育ってきているのは、手弁当で、骨身惜しまず基礎から指導してくれるジュニア部門の指導者がいるからです。関係者の一人として、非常に感謝しています。大学は、そうした選手を預かっているにすぎません。

「いのちの授業」始める

とは言いながら、「スポーツを科学する大学」の日本体育大学体育学部長。東京五輪には全学挙げて貢献することが使命だという。OB・OGを含め代表選手七十人を送り込む（ロンドン五輪は二十三人）目標だけでなく、コーチや補助役員、ボランティア、さらにJICA（国際協力事業団）を通して発展途上国にスポーツ指導者として派遣されている学生に、学んだ語学力を生かし通訳として活躍してもらうなど、あらゆる分野に目を配る。文字通り、「学生が見る、する、支える」スポーツという視点で五輪に取り組むことによって、教職員として、指導者としての能力を磨く機会にしたい。

――五輪の話題に引き換え、自殺者も出るなど学校内でのいじめの問題は深刻です。神奈川での取り組みを教えてください。

具志堅　いじめは陰湿で、卑怯な行為です。教育委員会として、いじめを決して許さない、毅然とした態度で臨む、相談できる環境を整える、という内容を盛り込んだ緊急アピールを表明したこともあります。また、いじめの実態把握や学校の取り組み状況を毎年調査していますが、これは抑止力につながると考えています。また、現場の先生方には、子供たちの何げない言葉の裏にいじめにつながる芽が潜んでいないかどうか、用心深く接するように求めています。

新しい試みとしては、昨年から小・中・高校で「思いやる心」「自分を大切にする心」を育むための「いのちの授業」を始め、県立高校では障害のある生徒とない生徒が一緒に授業を受ける取り組みも推進しています。

七九（昭和五十四）年に日本体育大学を卒業、同大学職員、日本体育大学女子短期大学講師、ドイツ留学などを経て、二〇〇五（平成十七）年からは日本大体育学部教授、さらに二年からは体育学部長兼教授の要職に就く。また、〇三年から神奈川県教育委員会委員、二年からは同委員会委員長として神奈川県の教育行政にかかわる。〇五年秋に紫綬褒章受章。

――赤い羽根共同募金運動の根底には、助け合いの精神が流れています。立場の弱い人への思いやり、支えあいの気持ちが募金につながります。その精神は、いじめ追放と重なり合うと思いますが…。

具志堅　全く同感です。困ったとき、人に助けてもらった行為は尊いと感じるもので、一生忘れません。

十年以上昔になりますが、大学の体育館が火事で焼失したことがありました。その再建のため募金活動をしたのですが、全国の同窓生たちが立ち上がり、多大な資金援助を受けました。練習場所も事欠くようになったのですが、各方面から「どうぞ使ってください」と提供を受けました。資金に、練習場所に困り果てていた時期だけに、ほんとにありがたかったと感謝しています。共同募金も、資金が不足している地域の施設やボランティア団体などに還元され、感謝されているに違いありません。

困っている人の立場に思いをはせること、感謝の気持ちを持ち合わせること。寄付にもつながり、いじめ解消の近道でもあるでしょう。

聞き手・神奈川県共同募金会
大谷義輝